

【論文】

成瀬正一の道程（一） ロマン・ロランとの交流

関口安義

成瀬正一<sup>(1)</sup>は、高・東大時代の芥川龍之介の友人である。二人に久米正雄・松岡譲・菊池寛を加えての同人雑誌が、文学史上名高い第四次『新思潮』<sup>(2)</sup>である。成瀬正一は第一次世界大戦中に、戦火のパリを経て、ジュネーブからレマン湖畔のヴェルヌーヴに滞在中のロマン・ロランを訪ね、戦争や平和の問題、さらにはアジアやアメリカの問題を真剣に議論している。わたしはかつて『評伝成瀬正一』<sup>(3)</sup>を刊行し、ロマン・ロランとの会見の様子も簡単に記した。

が、研究は日進月歩である。冷戦後のポストニア紛争をはじめとする民族間の争いを考える時、洋の東西、民族、人種、年齢を超えた二人の語らひは、二十一世紀のこんにち、新しい角度から評価される面をもって、わたしたちの前にあるのに気づく。新世紀を迎えた時点で成瀬正一の道程、今回は特にロマン・ロランとのかかわりに、いま一度光を当てようというのが本稿での試みである。これまた、わたしの芥川研究の一環である。

キーワード：芥川龍之介、第四次『新思潮』、夏目漱石、『ジャン・クリストフ』、理想主義

はじめに

芥川龍之介に「あの頃の自分の事」<sup>(4)</sup>という回想記がある。そこに若き日の成瀬正一が活写されている。中に「自分と成瀬との間には、可成懸隔<sup>(5)</sup>てのない友情が通つてゐた。その上その頃は思想の上でも、一致する点が少なくなかつた。殊に二人とも、偶然同時にジアン、

クリストフを読み出して、同時にそれに感服してゐた」の一節がある。

芥川龍之介の『ジャン・クリストフ』への傾倒は、彼がしばしば語っているところでもある。早くは雑誌『新潮』のアンケートに答えて、「ジャン、クリストフ」と題し、「余を最も強く感動せしめたる書」といへば、

ジャン・クリストフです。何でも始めて読んだ時は、途中でやめるのが惜しくつて、大学の講義を聞きに行かなかつた事が、よくありました。さうして朝から晩まで読みつゞけに読み通すのです」と書いています。同じことは「私の文壇に出るまで」にも見出せる。また、「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」では、大学時代の読書を回想し、「その頃読んだものゝ中で、殊に感激させられたものは、ジャン・クリストフであつた」と記している。芥川が「ジャン・クリストフ」を読み出したのは、一九一四(大正三)年初夏のことである。

一方、成瀬正一は同じ頃『ジャン・クリストフ』を読むのだが、のちロマン・ロランの『トルストイ』を芥川らに協力してもらつて翻訳出版した時、その「序」にロマン・ロランとの邂逅について述べている。以下のような。

ある時、友の芥川龍之介君が私に一書を示した。それはこの訳書の原著者なる、ロマン・ロオラン氏の『ジャン・クリストフ』であつた。二三頁拾

ひ読して居る中私は、驚くべき魅力に捉へられて、早速丸善へ行つて長大な『ジャン・クリストフ』を買つて来て猛烈な勢いで読み出した。読んで居る間私は、夢中になつて時間の経つのも考へなかつたが、読了後に、それまでにない大なる感奮を受けた。私は生き行くべき路を教へられたのである。わたしは幾度も繰り返へして読んだ。そしてもう此の書を離すことが出来なかつた。私が敬愛し愛慕して措かないロオラン氏を識つたのは、これが始めてであつた。

芥川の文章によれば、芥川と成瀬は、「偶然同時にジャン・クリストフを読み出して、同時にそれに感服してゐた」とのことだが、成瀬は「友の芥川龍之介君が私に一書を示し、『ジャン・クリストフ』の存在を知つたという。どちらの記憶が正しいかは措くとしても、ほぼ同じ時期に成瀬正一と芥川龍之介はロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を読み、大きな影響を受けていたのである。そしてこの『ジャン・クリストフ』体験をきっかけに、成瀬正一のロマン・ロランへの旅

がはじまるのである。

一 漱石ファンの熱血漢

一九一〇（明治四三）年、一高入学の芥川龍之介をはじめとする文学青年は、ほぼ全員が漱石ファンであった。例えば一高時代に芥川と深い友情を結ぶ井川恭（のちの恒藤恭）は、一高入学以前の一九〇七（明治四〇）年一月の時点で、松江の図書館で漱石にめぐりあい、その感想を「日記」にしばしば書き付けている。例えば一九〇七年一月十八日の「日記」には、次のようにある。

ホトトギス新年号の漱石の「野分」<sup>(10)</sup>の先日よんだ続きをよむ。中々長篇である。大体の筋は白井道也といふ文学士が道の為人格の為貧に窮するのも平然と己を持ち、嘗てその生徒であつた高柳といふ新文学士が貧に苦しみ病にもだえ、一人ぼつちに淋しく世を送り、最後に旧師に清らかな情宜をささげるといふので、それに中野といふ同窓の財産家の息子の文学士とその恋を点じてある。至る

所人生、社会に対する議論があつて実に面白くみなよみつくして四時半かへつた。

後年の法哲学者恒藤恭も、一時、夏目漱石に強くとられていたのである。それは若き成瀬正一と同様であつた。成瀬は一九一五（大正四）年三月七日の「成瀬日記」<sup>(11)</sup>に、次のように書いている。

私はどんなことがあつても夏目さんは世界一流の「literary man」だと思ふ。私はもう日本人として生まれたことを悔ない。何となれば日本には夏目さんがゐて、その本がよめるからである。夏目さんの本がよめるだけでも、日本人として生れる価値がある。田山花袋なんて愚人が夏目さんを悪く云ふのは分からないから仕方がないと云ふものもの憐なものだ。

成瀬正一が漱石の魅力にとらわれるのは、当時彼が山田八ナという少女に恋し、悩み多い日々を送つていたことともかわる。一九一五年春、大学二年生の成

瀬は、漱石の著作をことごとく集め、読み出すのであった。この年三月三十日の「成瀬日記」には、『虞美人草』<sup>(12)</sup>の感想が記されている。以下のようなものだ。

夏目さんの虞美人草をよんだ。

私は夏目さんはどんなことがあつても日本一の greatest figure だと思ふ。外国へ出しても決して一流の中の一、二を下るものでないと思ふ。私は自分が日本人と生れたことを常に呪つて居る。併し私は夏目さんの本をよんで、「夏目さんの本がよめることだけで、日本に生れたことを感謝する価値がある」と思つた。本当に私は読了した巻をとぎや何度もくく讃嘆の叫びをあげた。私がかんくよんで行つて、後の方になり甲野が父の額をとり下すあたりから熱狂にくくを重ねてよんで行つた。そして甲野の家へ宗近と小野と糸子と小夜子が来て愈々悲劇が起る所なんぞ大奔流。それは絶えざる生の叫のする生きた流れの様に感じた。私は甲野の心持に何とも云へない敬虔の心地がする。彼が額を下してゐる時の態度なんぞたまらな

い。私は甲野と宗近の語る「真面目」を大変ありがたく思つた。そして宗近が小野さんに「君は常に不安にばかり駆られてゐて真面目になることが出来ないのではないか」と云つた言葉に私はギクツとした。なるほど私も「真面目」を欠いてゐた。私のHを恋した様な所があればせぬかと思ふと確にあると思つた。

漱石の『虞美人草』を成瀬は自らの恋愛に重ねて読んでいた。漱石の文学には、普遍化された真実が宿る。成瀬はそれを見抜いているのである。『虞美人草』を読み終えた成瀬は、次に『社会と自分』<sup>(13)</sup>という講演集に入る。読み終えての感想は、これまた「日記」に記している。

「中味と形式」については、「私は文学に就て持つてゐる内容と形式に関する考と同一であつて新旧思想の衝突の止むを得ざることを説いて、新思想の凱歌を奏することを断言したものである」(一九二五・四・一)とある。また、「文芸と道徳」については、「ロマンチズムとナチュラリズムとの道徳に対する位置関係を説

いたものだ。夏目さんはむづかしい問題を非常にやさしく論ずることが上手だ」(一九一五・四・三)とある。さらに「芸術家の態度」については、「少しむづかしく夏目さんの他の小説をよむ様に拵らなかつたけれども中々内容のある名文であつた。創作家はかくの如くschaffenすべしと説いてあるものかと思つてよんだが、そうではななく、の創作家の態度を論じたものであつた」(一九一五・四・六)とある。

成瀬は漱石の『それから』『門』をはじめ、ほとんどの著作を、この年の春から夏にかけて読んでしまう。成瀬の漱石傾倒は、『新思潮』時代にピークを迎える。そういう成瀬を菊池寛は、「先生と我等」で、「成瀬は創作の方面では余り影響を受けなかつたが、文学者としての先生に深く私淑して居た。成瀬と文学の話をして居ると、よく『文学論』や『文学評論』が引合に出された。先生の著書を悉く蒐めて居たのも、成瀬であつた」と言つた。

成瀬正一は第四次『新思潮』一九一六(大正五)年六月号(第一号第四号)の「校正の後に」に、次のように記している。

学究的修養は大きな仕事をする土台としてあるのみだ。私達は、学究的仕事の価値を認めない訳ではない。それを通り越して、更にその上に出やうとするのである。私達はさう云ふ点で、夏目漱石先生を、日本の文壇のどの先輩よりも多く尊敬する。

成瀬正一は第四次『新思潮』五人の仲間の中で、一番の漱石ファンながら、その漱石門入りは、他の仲間、芥川・久米・松岡より半年以上遅れている。彼等の牛込区早稲田南町の漱石山房訪問は、まず芥川龍之介と久米正雄が一九一五(大正四)年十一月十八日の木曜日に、仏文科の林原耕三の手引きで実施された。続いて松岡譲が十二月二日の木曜日に、久米に誘われ訪問する。この日久米は成瀬にも声をかけたかったが、成瀬はこの年十一月二十五日から十二月四日まで京都・神戸方面に旅行中だったので実現しなかつた。「成瀬日記」には、「十日ばかりの貴重な時間を犠牲にして親孝行をしようと思つて、母と老た伯母をつれて昨日

京都へ来た」(一九一五・一一・二六)とある。

熱烈な漱石ファン<sup>ファン</sup>の成瀬正一が、この時期漱石山房を訪れていないのは、旅行で東京を留守したためなのである。彼がはじめて漱石山房を訪れるのは、年を越した一九一六年七月下旬、アメリカ留学に立つ寸前のことである。小柄ながら、才気走り、熱意に満ちたあこがれの眼を注ぐ成瀬を、漱石は記憶に留めた。成瀬はアメリカ到着を知らせる便りを漱石に出したらしい。それは記録に残っていないが、その返信と思われる成瀬宛漱石書簡(一九一六・一一・一六付)が一通、『漱石全集』に収められている。ついで利用されることもない漱石書簡なので、以下に全文を引用する。

御安着結構です。あなたの独探の話(航海中の)は新思潮で読みました。面白いです。通信もよみました。あなたはヒポドロームへ芝居を見る気か何かで飛び込みましたね。芥川君は売ツ子になりました。久米君もすぐ名が出るでせう。二人とも始終来ます。菊池君又は新聞記者で忙がしいので来ません。もう一人の連中哲学

者(越後の)も来ます。「明暗」は長くなる許で困ります。まだ書いています。来年迄つゞくでせう。本になつたら読んで下さい。コレラはもう下火です。文展ももう御仕舞になります。昨日から寒くなりました。右迄 草々

右書簡中の「独探の話(航海中の)」というのは、『新思潮』一九一六年十一月号に載つた成瀬の創作「航海」<sup>(15)</sup>を指す。

太平洋をアメリカに向かう客船で見かけたカワルスキーというロシア人が、上陸寸前にドイツのスパイであることがわかり、連行されるという実話をもとに創作したものである。客船という特殊な環境での人々の生活を活写し、読ませるものをもつ。

また、「通信」というのは、同じ『新思潮』十一月号の成瀬のアメリカ通信「紐育より(一)」である。「哲学者(越後の)」というのは、当時大学の哲学科に在籍していた越後長岡出身の松岡譲を指す。この一通の手紙が証するのは、成瀬正一も漱石に愛された弟子の一人だったということである。

多血質の熱血漢成瀬正一は、漱石からの便りを手に入ります。まず漱石に学び、勉強に精を出すことを誓う。その成果は漱石の『文学論』を意識した「創作に於ける個人性と文芸批評」という論文である。これは『新思潮』一九一七（大正六）年三月に出た「漱石先生追慕号」に載った。

## 二一 ロマン・ロランとの文通

成瀬正一は一八九二（明治二五）年四月二十六日、裕福な事業家の家に生まれ、育った。父成瀬正恭は草創期の慶應義塾の卒業生で、福沢諭吉の勧めでアメリカのコーネル大学に学び、法学博士の学位を得、帰国後横浜正金銀行を振り出しに銀行界で活躍した。正一が生まれた頃は、当時華族銀行と呼ばれた十五銀行の頭取をし、芝区白金三光町に広大な屋敷を構えていた。ほかに逗子の海岸には、後年の『新思潮』の仲間がしばしば利用した別荘もあった。

成瀬正一は私立麻布中学校を経て一高に入学、芥川龍之介らと知り合う。東京帝国大学文科大学に進学した頃から、卒業後の欧米留学を考え、フランス語を山

田八ナという少女から個人レッスンを受けるようになる。麻布中学校時代は、小林光（生徒は光さんと呼ぶ）という名物教師から英語を学び、一高時代には、岩元禎や福岡博らからドイツ語で絞られており、語学の勉強には関心があったのである。大学に入ってから、彼はフランス語を学びたいと思っていた。彼は父の異母弟成瀬正義に相談する。正義が紹介したのが、リヨン生まれで十歳まで当地の女子校で教育を受け、いまは聖心女子学院に通う十六歳の少女山田八ナであった。後に指導は、八ナからの申し出もあつて姉の山田キクに移る。

ちなみに八ナの姉キクは、後年フランス文壇で活躍したキク・ヤマタである。『マサコ』をはじめとする小説や蘆花の『思出の記』や谷崎潤一郎の『蘆刈』や大佛次郎の『帰郷』の仏訳でも知られる。八ナやキクに関する詳しい情報は、小著『評伝成瀬正一』<sup>(16)</sup>を参照してほしい。成瀬はこうした条件もあつて、フランス語にある程度通じており、それがこれから述べるロマン・ロランとの文通に大いに役立ったのである。学びはじめて一年で、彼はロランへフランス語で手紙が書

けるだけの力をつけてしまう。先に見たように成瀬は、大の漱石ファンであった。それが熱烈なロマン・ロラン心酔者になってしまふ。きっかけは『ジャン・クリストフ』にあった。

芥川龍之介や成瀬正一や松岡譲がこの頃読んだ『ジャン・クリストフ』は、ジルバート・カナン訳の英訳本であった。それは成瀬がロマン・ロランへのはじめの便り(一九一五・四・一四付)にはつきりと書いている。当時は芥川の府立三中の先輩後藤末雄の訳本も、まして彼らの一年先輩で、第三次『新思潮』の同人でもあつた豊島与志雄訳のものも存在していない。こんにち名訳として誉れの高い豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ』の第一編が新潮社から出るのは、一九二〇(大正九)年九月二十日であり、全四編の完結は、一九三三(大正二二)年六月四日のことである。

成瀬正一が『ジャン・クリストフ』の第一巻を英訳で読み終えたのは、「成瀬日記」によると、一九一四(大正三)年七月九日である。「大なるく同感を以つて始終緊張して読むことが出来た。私がもしあの少年クリストフの様な位置にあつたらどんなにして生きてた

らう。それは云はずに明だ。勿論彼のように生きてたらう」と成瀬は記している。続いて第二巻を同月二十一日に読み終える。その感想を成瀬は「日記」に次のように記す。

Jean Christopheの英訳の第一巻を読み終つた。私は何度もなく感激の涙を頬に流しつゝ読んで行つた。そしてChristopheが兵士と喧嘩して国外へ逃れて、一少女の持つて来た母の手紙をよむ時は、留め度もなく涙が流れた。そして知らずく声を出して読んだ。妙な抑揚をつけて。

彼の性格は私の通りであつた。私は本を伏せて四百頁の大冊を眺めつゝイリジヨンに耽溺した。

二巻を読み終えた成瀬はすぐ三巻のParisに入る。百ページほど読んでの感想を「日記」に、「クリストフがバリーの気風に対する反抗も面白く読んだ。私は今迄これほど感激して読んだものはない」(一九一四・七・二六)と書きつける。七月二十九日の夕方、第三巻を涙の下に読み終える。続いて第四巻に入っている。当時



フランス語の個人教師をしてもらっていた山田ハナとの愛に苦しんでいた成瀬には、クリストフの苦悩がよくわかった。そして「私の苦悶なんかChristopheの苦悶に比べれば、自ら求めたものである様に思はれた。私はただ一人になってSwissの山村に行つて絶へざる精神の呵責を制せんとするChristopheに涙の同情をした」(二九一四・八・八)との感想を懐く。

『ジャン・クリストフ』は純粹一途な青年成瀬正一の愛読書となつていく。二年後、アメリカ留学に立つ客船静岡丸に持参し、航海中読んだ書物も、『ジャン・クリストフ』であつた。クリストフの苦闘の生涯は、誠実に生きようとして悩む者に光を与える力があつた。常に向上を願ひ、人生の矛盾と闘ひながら日々を歩んでいた成瀬正一に、クリストフの生涯は一の指標であつた。高い理想を懐き、前進するクリストフの苦闘の生涯に、成瀬は学ぼうとするのであつた。

彼は『ジャン・クリストフ』の虜となる。何度も読み返すうちに、彼にはその作者ロマン・ロランが漱石とともに偉大な師となつてくる。彼はロランの偉人叢書『ミケランジェロ』や『ベーターベン』や『ミレー』

や『トルストイ』を取り寄せ、熱心に読む。熱血漢の彼は、じつとしていることができず、その思いを仲間(47)に語り、やがてはロマン・ロランに手紙を出すに至るのである。

成瀬正一がロマン・ロランへ手紙を出し、返事をもらつたという情報は、第四次『新思潮』をひもとくならなら誰もが知ることができる。また、どのような手紙を出したのかは、『ロマン・ロラン全集』の「戦時の日記」にロランが書き写しているで参看できる。欧米人はしばしば相手からもらった手紙を、日記に全文を書き写す習慣がある。それは仮名や漢字から成る日本の文章と異なり、文字数が少ないことから比較的容易なためと思われる。

いま、成瀬正一がロマン・ロランに送つた手紙の第一信を「戦時の日記」から引用しよう。日本語訳は山口三夫である。

一九一五年四月十日、東京、謹啓 まつ

たく未知の私がお手紙を差し上げるのをお許し下さい。私は東京帝国大学文学部の学生で、成瀬正

一と申します。ジルバート・カナンの英訳で『ジャン・クリストフ』を拝読し、私の尊敬と感謝を申し述べたいと存じます。最後の巻の献辞 As

I finish this work I dedicate it: to the free spirits- of all nations- who suffer 'fight' and prevail (おわるにあたり、私はこの書を、悩み、戦い、うち勝っている あらゆる国の 自由な精神たちに捧げる)『クリストフ』全体の献辞となった』を讀みながら、私は、自分がこの書が捧げられている人たちの一人であることを感じました。貴著を拝読しながら私はしばしば涙しました。そしてあなたが私の涙を嘲笑されはしないだろうと信じます。それは感傷的な涙ではありません。生のもつとも深みにふれているこれらのものに、私が強く打たれたからでした。私は真の文学は言葉の戯れではないとかたく信じております。機知と感傷性が文学の本質であると信じている人々たちを、私は憎みます。私はそのような文学が存在することとは認めますが、もっと高くそびえ立ち、王座についている文学があることを知っています。それ

は生の文学です。わたしは偉大な人間でない芸術家は存在する権利をもたないと確信していますが、この確信が、あなたの偉大な書を拝読して、完全に正しいものであることが証明されたと感じたのでした。……

後半は省略された手紙のようだが、成瀬の便りは、ロマン・ロランを感動させることになる。ロランはすぐにペンを執って、五月二十三日付で返事を書く。第四次『新思潮』一九一六年六月号に「ロオラン氏の手紙」として、成瀬の翻訳で載せられたのがそれである。やや古風な訳文なので、ここには第二次世界大戦後の翻訳である右と同じ山口三天訳で示したい。

はるかな若い友よ、あなたの共感に感謝します。私は、あなたがクリストフに一人の兄弟を認められたことを嬉しく思います。あなたのおっしゃることは正しい。あらゆる芸術の源泉は生、精神がつらぬいて照らします、神秘的な深い生なのです。けれども今日の芸術家たち(にせ芸術家たち)は、

生の入口でとどまっていた、芸術は彼らにとって  
は玩具です。私たちが通りすぎつつあるこの世界  
的な危機が、彼らの無益さを明らかにしています。  
この戦争は人びとの魂をはかりにかけているので  
す。ヨーロッパの選良のうちごくわずかの人たち  
しか、憎しみの錯乱状態に抵抗しませんでした。  
とはいえ、この時代は諸国民の英雄精神によって  
偉大です。けれどもこの時代には精神的指導者が  
なく、頭のない巨大なトルソのようなものです。  
親愛な成瀬正一、ヨーロッパ諸国の国語や思想を  
よく学ぶことをおつづけなさい。けれども、アジ  
アの思想のなかにあるすべての偉大なものに浸さ  
れているようになさい。私たちは今や、二つの世  
界の富を共通なものとするために働かねばなりま  
せん。アジアがヨーロッパを必要とすると同じだ  
け、ヨーロッパはアジアを必要としているのです。  
このことを私は確信します。これら二つの広大な  
大河は、ついにはその水を合流させねばならない  
のです。……人類が更新しつつあり、大きな仕事  
があり余るほどある、悲劇的なこの時期に勇気を

もって幸福にお暮し下さい。……

期待もしなかったロランからの返信に接し、成瀬は  
驚くと同時によろこびに満ちる。ロランは成瀬の期待  
を裏切らなかつた。「この戦争は人びとの魂をはかりに  
かけているのです」とロランは言い、成瀬に「ヨーロ  
ッパ諸国の国語や思想をよく学ぶことをおつづけな  
さい」と勧告するのであった。ロランには若き日の自分  
にダブって見える成瀬正一に、ちょうどトルストイか  
ら便りを貰い、感動したことを思い出しながら返事を  
書いたのであろう。そこには友愛の精神が満ちていた。  
ロマン・ロランの手紙を評して蜷原徳夫は、「ロラン  
の手紙を読む者の胸を第一に打つものは、そのいづれ  
にもみなみとあふれている温情である。相手が年若  
い人びとである場合には、それは文字どおりに慈父の  
情となつて、親身も及ばぬほどのこまやかな思いやり  
やいつくしみとして流露している。この温情はロラン  
の美しい人となりの発露であるばかりでなく、ロラ  
ンのいとなみいっさいの主導動機<sup>18)</sup>となっている。「愛」  
の思想の顕現でもある」と言つが、右の成瀬への手紙

にもそのことはつかえる。

前述のように、成瀬はその頃フランス語を習っていた少女、山田ハナとの関係に苦しんでいた。ハナへの愛と憎しみは、『ジャン・クリストフ』の世界をいつそう彼に近づけることとなる。「成瀬日記」によると、ロランへの第一信は、ハナへの思いを断つ中で書かれている。

ロランの便りを手に、成瀬はすぐ二度目の便りを書く。ロランは『戦時の日記』に「魅力的な若い日本人成瀬正一から二度目の手紙（一九一五年六月二十日、東京）。私の名はいまや日本で非常によく知られていると述べている。……来年、私は東京帝国大学文学部を卒業し、あなたにお会いするためフランスへとんでいくでしょう。……」（山口三夫訳）と書きつけている。

ロマン・ロランは当時四十九歳（一八六六年一月二十九日生）であった。成瀬正一は二十三歳なので、二人の間には二十六年の年齢差があった。これは親子の年齢差に等しい。時は第一次世界大戦の最中である。ロランはたまたま滞在中のスイスで開戦を迎え、反戦論を唱えたため祖国フランスに帰れないという苦しい状況に

あった。そうした時に子の世代に当たる極東の一青年の手紙は、明るい灯となったのである。純な感激と打算のない高貴な精神に満ちた成瀬正一の便りは、『ジャン・クリストフ』の作家に深い印象を与えたのであった。

ロランは成瀬を「魅力的な若い日本人成瀬正一」と言い、その手紙の多くを書き留めている。洋の東西、民族、人種、年齢、言語を越えた稀に見る精神的交流が、ここに始まるのである。このことは簡単な指摘はあっても、過去に本格的に論じられた形跡はない。が、成瀬正一とロマンロランの精神的交流は、大正デモクラシーを背景としたロランの民衆芸術論の紹介以上に重い意味があると私は思う。ロランは成瀬の高潔な理想主義を高く評価した。以後成瀬とロマン・ロランとの間には、しばしば書信が交わされ、それは成瀬のアメリカ留学中に及ぶ。

ロマン・ロラン著『トルストイ』が、成瀬を中心に芥川・久米・松岡の協力を得て、成瀬正一の名で、新潮社から出るのは、こうした書信のやりとりが伏線となっていたのである。成瀬の『トルストイ』<sup>(19)</sup> 翻訳に賭

けた熱意と苦心は、小著『評伝 成瀬正一』<sup>(20)</sup>を参照して  
いただきたい。

### 三 アメリカ留学から戦乱のバリへ

一九一六（大正五）年八月三日、成瀬正一は横浜港からアメリカ留学の途についた。芥川龍之介の小品「出帆」<sup>(21)</sup>は、この日の成瀬の船出模様取材したものである。カナダのヴィクトリア、そしてシカゴ経由で、成瀬は八月二十三日の夜、ニューヨークに到着する。グランドセントラル駅には、父正恭の留学時代の友人、マックラレンが迎えに来ており、その世話でコロンビア大学に籍を置くことになる。大学がはじまる九月の下旬まで、彼は劇場通いに日を通<sup>22</sup>こす。九月二十日、コロンビア大学の大学院に入学する。コロンビア大学は一七五四年創立、アメリカ東部の名門校である。が、成瀬は大学院の講義に失望する。彼はその思いを日本の松岡譲に書き送っている（一九一六・一〇・一一付）。わたしの手許には、その書簡がある。

コロンビア大学の大学院を退学した成瀬は、創作と文学研究と美術館通いに没頭する。フロリダやカナダ

への旅もしている。翌年一九一七年には、ボストンのハーヴァード大学大学院に入学するものの、ここでも彼の情熱は満たされなかった。彼はロマン・ロランに会いに行き、さまざまな問題を話し合いたいと思った。ロランならどう考えるだろうかといった課題が、彼の頭を占めていた。が、ヨーロッパは戦乱の中にあり、彼の両親はヨーロッパ行きを認めなかった。

アメリカ滞在一年半の間、成瀬正一は絶えずロマン・ロランに便りを出していた。到着間もない一九一六（大正五）年十月七日の手紙は、ロランが『戦時の日記』に書き留めている。若き成瀬正一の誠実な、そして人の心を動かす熱意に燃えた便りである。成瀬の九州大学時代の教え子大塚幸男に「ロマン・ロランと成瀬正一——第一次世界大戦下、東西両洋の出会い」<sup>(22)</sup>と題する論文がある。そこには大塚の手になる翻訳がみられ、

解説が付いている。みずず書房版『ロマン・ロラン全集』での翻訳は、蛭原徳夫である。長文の手紙なので、ここでの引用は差し控えるが、格調高い、そして内容の濃い書簡である。いま、全集の蛭原徳夫訳で見ると、成瀬はロランの『戦いを越えて』を読み、「また別の

『ジャン・クリストフ』を読んだような気がしましたが、感動はもっと大きいものでした」と書いている。成瀬はロランに「私はあなたが闘われ、また苦しまれているがゆえに、あなたを大いに尊敬し、あなたに深く共鳴します。どうか勇気をおもち下さい」と言う。

理想と現実との狭間にあつて絶えず悩み、苦しんでいた成瀬正一には、ロランの状況がよく理解できた。成瀬はまた、戦争に関しての本質的な問題を取り上げる。「ヨーロッパの現在の戦争やすべての国民の戦争の主な源は、各民族間の反感の感情です」と成瀬は言うが、それは冷戦後のこんにちの世界の状況をも言い当てている。特に一九九二(平成四)年に民族紛争から内戦に発展したボスニア紛争、スーダンをはじめとするアフリカ諸国の内戦などが、たちどころに想起出来るではないか。ここで成瀬が言及した「各民族間の反感の感情」というのは、根が深く、重い問題である。それは文化の差異や宗教・政治・経済が微妙にからまって生じる。それを乗り越えるには相互理解きりない。芸術家や思想家の仕事は、ここにあると成瀬は熱誠をもってロランに向かって言う。

手紙の終わりの箇所で、成瀬正一の精神はいつそう高揚する。教会の礼拝案内のピラに書かれたことばに言及し、その感動を次のように伝える。(以下も翻訳はすべて『ロマン・ロラン全集』収録「戦時の日記」の姥原徳夫訳による)

私はキリスト教徒ではありませんが、深く慰められ、眼に涙が浮かんできました。私は当地では悲しくて、知る人もいなかったので。もちろん私は教会へ行こうとは思いません。しかしこの深くて自由な愛！ 私は戦争の中心から遠く離れています。私が、ヨーロッパの落ちこんでいる人類の悲しみを、深く感じています。あなたは私よりも一世代だけ年長者です。けれどもあなたと私との間には、揺がぬ橋がかかっています。あなたの偉大なご本に心からお礼を申し上げます。どうか勇気をおもちになり、生活の上で恵まれておいでになりますように！ あなたを情熱をこめて、抱きしめます。(こう申し上げることをお許し下さい。) あなたの忠実な友である

成瀬正一

ロマン・ロランは、この手紙に心底から感動する。彼は成瀬の手紙を写し終えて、「ああ、魂たちの友愛！ 深淵を越えて差し出された手！」と書き添える。極東の一青年のひたむきな平和を愛する精神に満たされた手紙に、ロランはいたく打たれたのである。

成瀬は右の手紙で、「私は社会主義者」であると繰り返し述べる。そしてロランとの共闘をよびかけ、人々が「私たちの言葉に耳を傾けないならば、私たちはこの地上に楽園を実現させるために、次の世代の人に話しかけましよう。私はその仕事のために自分の生涯を捧げたいと思います。そしてそのためにこそ、私はあなたを尊敬し、あなたに共鳴し、あなたを限りなく愛しさえするのです。どうか勇氣をおもちになり、よいお仕事をなさって下さい！」とも言う。

大塚幸男は「成瀬の長文の手紙は、世界を挙げての暴力の狂気に巻きこまれていた第一次大戦下における東西両洋の二つの自由な魂　その理性の声の交流を示す歴史的文献であるといっても過言ではあるまい」

と先の論文の解説で述べている。まさにその通りなのである。若き成瀬正一の反戦意識、その平和への強き願いは、高く評価されねばならぬ。それは一高時代の仲間、芥川龍之介や恒藤恭の生涯における社会意識や歴史認識とも交差する。<sup>23)</sup>

芥川龍之介は中国視察旅行を通して、日本帝国主義への民衆の怒りを、現地の知識人との会話や人々の落書きなどから察知し、やがて「將軍」や「桃太郎」などの反戦小説を書く。恒藤恭は戦前一九三三（昭和八）年の京大事件を闘い抜き、第二次世界大戦後は、平和運動の理論的支柱となった。彼らのそうした行動の原点に、一九一（明治四四）年二月一日、第一高等学校第一大教場で行われた徳富蘆花の「謀叛論」演説があるとは、これまでわたしがしばしばふれてきたところである。

本筋に戻ろう。ロランは右の成瀬の手紙に深く感動する。彼は直ちにペンを執って十月二十八日付での返事を出す。その下書きを彼は「戦時の日記」に残している。ロランは「お手紙に深く心を打たれました」と言い、「人種を異にし文明を異にする若い兄弟のうちに、

私に流れるのと同じ人間性が流れているのを感じるのは、私にとつて嬉しいことです。私の力はそれによつて強められました」と書いています。さらにロランは、自分が倒れても、その理想は地球のどこかで、思想上の兄弟の手によつて、引き継がれて行くであろうことを知つて力づけられたとも言つて。

成瀬正一の熱性あふれる手紙は、第一次世界大戦中孤独を余儀なくされていたロマン・ロランを励まし、勇気づけたのであつた。ロランはアメリカで精神的に孤独であつた成瀬に深く同情する。その孤独を癒すよき仲間として、ロランは成瀬に小説家のウオルド・フランクと音楽家のエルネスト・プロックという、二人のロランファンを青年を紹介する。この二人の青年と成瀬正一との交流は、すでに小著に書いたことでもあるので、ここでは省略する。成瀬のロラン宛便りの一通に、「私はたびたびウオルド・フランクやエルネスト・プロックに会い、互いに励まし合つています」(清水茂訳、一九一七・五・一八付)とある。また、日本の松岡譲あての手紙には、「私はロオラン氏に紹介されたフランク云ふ青年と、プロックと云ふ作家に会つて、タ

食を共にした。彼等はいゝ奴である。君日本人と米人とスイス人が一堂に会して、同じ心で語るたのしみは想像に難くあるまい」(一九一六・二一・一八付)と書いています。

アメリカでの成瀬正一は、前述のようにコロンビア大学やハーヴァード大学の大学院に籍を置いたものの、どちらも授業は満足するものではなかつた。一九一七(大正六)年九月入学したハーヴァードでの講義も少しも面白くなかつた。「私は Emerson の哲学及文学の講義をきいてゐるが、つまらないので呆れてしまつた」(松岡譲宛、一九一七・一一・二三付)と彼は日本の友人にこぼしている。

彼は美術館めぐりやフロリダやカナダへの旅をしては、鬱懷を晴らしていた。旅でもしななければ、やりきれなかつたのである。「フロリダ行き」(『帝国文学』一九一七・二二)や「カナダの旅行」(『帝国文学』一九一八・二二)は、その収獲であつた。若き成瀬正一のこれらの紀行文は、いま読んでも十分鑑賞に耐えるものとなっている。

一九一八(大正七)年三月二十二日、成瀬正一は望み



かなってフランス行きの船に乗る。その日ニューヨーク港の棧橋の上で、彼は母峰子の死を知らせる電報を受け取る。尿毒症による急逝であった。彼は日本に帰るべきか、フランスに行くべきかで深く悩む。が、彼は後者を選んだ。いま、ヨーロッパへ行き、ロマン・ロランに会わなければ、アメリカ滞在の一年半の意味がなくなる。彼は勇んでフランス行きの船の客となった。ドイツ潜水艦の危険を冒しての旅であった。

成瀬は空襲下のパリに、二か月半ほど滞在した。戦時下のパリはルーヴルをはじめとする多くの美術館は軒並み閉館で、アメリカ時代からの成瀬の好みとなった美術館めぐりはできなかつた。ヴェルサイユ宮殿やエリゼ宮（大統領官邸）に行っても中に入ることはできず、外から昔の豪華をしのぶことしかできなかった。が、パリは成瀬に好印象を与えた。彼はシャンゼリゼ通りを歩き、やっとフランスに來たのだということを実感した。

日本の松岡讓に当てた便りの一節には、「一生懸命にフランスのclassicを勉強する。今にして思へば英文をやつたのは一生の失敗であつた」（一九一八・四・一九付）

とある。後年フランス文学者となる成瀬正一を自ら語ることはである。

やがて空襲が激しくなつたパリを離れ、成瀬は目的のロマン・ロラン訪問の旅に出ることになる。彼はパリから四六〇キロのリヨンに避難し、そこからスイスに入国、ロランに会おうとしたのである。

#### 四 ロマン・ロランとの対話

成瀬正一の「瑞西の旅」『中央公論』一九一九・四）は、七月十三日、里昂リヨンへ來てから、今日で、丁度一月になる。昨日県庁から通知があつて、予て出願して置いた瑞西旅行が許可になつたので、思切てこの町を去ることにした」にはじまる。成瀬はアメリカ留学以来、折々の旅の記録を紀行文にまとめて発表していた。先のフロリダやカナダの旅の紀行文に続き、ここにスイスの旅の紀行文が生まれる。成瀬はリヨンからスイスに入国し、ジュネーヴに着く。ジュネーヴの宿は、レマン湖畔のボー・リヴァージュ（Beau Rivage）という大きなホテル（現存）であつた。翌朝目覚めた成瀬は、この町を次のように描く。

湖水も市街も皆、今將に開け放れやうとする光に照らされて、浮き上るやうに眼の下達に拡がつてゐる。窓の直下を走つてゐる遊歩路プロムナードから、嘔せると思はれる程強いアカシアの香が立上る。まだ行人の影は稀である。白塗の遊覧船が数艘、湖水の浮むでゐる。その間を白鳥の群が、静な波紋を曳きつゝ、縫ふ如く滑つて行くのが見える。大きな鳥の姿は、舢船サムボットの影に、現れたり消えたりする。湖水の上に島がある。その上に白楊樹ポプラが茂つてゐる。その側に橋がある。その向ふに高い尖塔を持つた教会が二つ三つ見えてゐる。針のやうな塔の頂が、金の如く輝き初めたのは、もう陽が昇るからであらう。モン・ブランの雪は既に、銅の如く旭を浴びてゐる。凡ての上には、これから醒めやうとする静けさがある。

成瀬正一の紀行文は、みずみずしい感性に支えられ、読ませるものがある。フロリダやカナダの旅に続くスイスの旅の記録は、詩人的感奮が文章に流露している。

もう一つの例を『中央公論』掲載「瑞西の旅」から引く。

澄切つた湖の水に産湯をつかひ、菩提樹の芳香を吸ひ、遠山の雪を眺め、常に音楽の曲メロディーを聴いて成長した乙女達は、生れながらに、透きとほるやうな体と、涼しい眼とを持つてゐる。その歩は軽い。他国の女達が、華奢な装をして意匠を凝らす時、彼等は、たゞ軽い薄絹を纏へばそれで足るのである。淡桃、淡青、淡黄、純白を着ければそれで足りるのである。清い空気と持つて生れた清楚な体は、それを、錦にも勝つた美しい衣装とするのである。さう云ふ衣装を着て湖畔を行く乙女等を見てみると、もう女と云ふ氣もしない。着物も眼に立たない。たゞ、恍惚として魂を奪去るやうなある美しい姿として感じられるのみである、少くとも、奏樂堂コンサートホールの階上庭園から、軽い夏装束をして笑ひさゞめきながら遊歩道プロムナードを行く乙女達の群を眺めてゐた私にとつては、

何時の間にか私は、群を離れて、たゞ一人佇む

である桃色姿の乙女を凝視<sup>みつめ</sup>てみた。遊歩道<sup>ユウポドウ</sup>の側から、遊覧船の乗降に用ひられる白塗の棧橋が、湖上に突出してゐる。私の乙女は、その棧橋の上に帽子も被らずに、豊かな金髪を風に靡かせながら佇立してゐるのである。その姿が、沈まうとする夕日に照されて、鏡のやうな湖に細長い影を投げてゐる。その影に乙女は見入つてゐるやうに見える。彼女の背後には、人の流れが限もなく続いて行く。その人の流に振向もせずには彼女は、凝平と己の影を眺めてゐるのである。暫乙女の姿から眼を話さなかつた私は、やがて、白鳥が二三羽、桃色姿が佇んでゐる棧橋の下の穹窿<sup>クワウロウ</sup>を、滑るやうに過行くのを見た。けれども乙女はそれを知らなかつた。何時までも自分の影に見入つてゐた。

詩人の面影の漂う若き成瀬正一の紀行文は、どれもが至純の心持が溢れ、読む者を打つ。右の文章もそうした点をよく示している。これから扱うロマン・ロラン訪問記を含む成瀬正一の紀行文が一つにまとまると、そこに理想を高く掲げた詩人の姿が浮かびあがる

はずである。

成瀬はジュネーヴに一週間ほど過ごす。到着翌日の七月十四日、彼はヴェルヌーヴのロマン・ロランに無事国境を越えたことを知らせている。ロランは『戦時の日記』に、「また会つたことのない若い日本の友、成瀬正一がジュネーヴから、彼がようやくスイスに入国できたと書いてくる（七月十四日）」（宮本正清訳）と書き留めている。

ジュネーヴで一週間を過ごした成瀬正一の許に、レマン湖畔の東端に所在する村、ヴェルヌーヴにいるロマン・ロランからの返信が届く。ロランは懇切に道順を示し、いつでも来るよつにと伝えてきたのである。成瀬は勇んでロランの許へと急ぐ。一九一八（大正七年七月二十日）のことである。その高ぶる気持ちを、右の「瑞西の旅」は、以下のように記している。

七月二十日、私は、数年来吾師と仰いで、片時も邂逅を欲して止まなかつたロマン・ロランを、その仮寓の地なるヴィルヌウヴに訪ふため、湖水の上を通ふ遊覧船に乗つた。ヴィルヌウヴは、レ

エマン湖の東端にある小村で、ロオランは、欧州戦争の勃発以来、そこにある客舎オテル・ピロンに居を構へてゐるのである。瑞西に入ると同時に手紙をやつて面会の都合を問合せたのであるが、親切な彼は、道順まで教へて呉れた上、何日でも来るやうに返事を呉れたのである。

五年前にその大著ジャン・クリストフを繙読して以来、私の心は絶えず彼に向つてゐた。時折の通信こそ相互の間に交されてゐたとは云へ、彼は欧州に、私は東京にあつて、万里を隔てながら、夜も昼も、折に触れ時に触れ、彼の写真を眺めてはその風貌を想ひ、さては、想像の赴くまゝに、対面の様まで胸に描いてゐたのであるから、やうやく瑞西に辿着いた今、私は、不思議な神経の興奮を奈何ともすることが出来なかつた。

『中央公論』に載せた「瑞西の旅」は、サヴオワという遊覧船に乗ってレマン湖を渡り、パイロンの歌つたシヨン城(Chateau de Chillon)を眺め、夕方、ロラン滞在中のヴェルヌーヴを目前としたところで終わる。

最後は「目的地ヴィルヌウヴは、もう眼の先にある。着いたのは、空が一面に焼けて、湖水に雲の影が明な時であつた。すぐオテル・ピロンへ急ぐ」とある。

「瑞西の旅」の続きは、舞台を変えて一九二〇(大正九)年二月号の『人間』に載る。タイトルは同じ「瑞西の旅」であるが、こちらはロマン・ロラン訪問記でもいへそうな文章である。その冒頭を引用しよう。

ロオラン氏に会つたのはその夕刻であつた。旅舎に到着早々、室内をとりかたづけに來た女に、氏はこの宿に泊つてゐるのかと訊くと、多弁な彼女は、幕の手を休めて怪訝に堪へないやうな眼つきをした。突然投宿した東洋の一黄人が、親気にロオラン氏のことを問ふたのが、余程不思議であつたのであらう。

「お知合なのですか。」

さうだと答へると、「この下にゐます。御両親と妹さんと一緒に」と云ひながら、足をあげて激しく床を踏むだ。私の室は、湖水に面した四階だから、氏とその家族は、その下の三階にゐるのであ

らじ。

彼女に名刺を渡して取次を頼むと、思ひ掛なくも、氏自身直ぐに私の室へ這入つて来た。恐縮して迎へやうとする間もなく、大股に歩み寄つて氏は、堅く握手をした。

Monsieur Naruse?

さう云つたまゝロオラン氏は何も云はなかつた。「私が成瀬です」と云つたまゝ、私も亦何も云はなかつた。吾々は暫、無言のまゝ相對してゐた。

成瀬正一のロマン・ロラン会見記は、一大ドキュメントである。あこがれの人、ロマン・ロランに成瀬はついに会い、ことばを交わすこととなるのであつた。時にロマン・ロラン五十二歳、成瀬正一二十六歳であつた。洋の東西を越え、年齢を越えた交わりが始まる。ロランは成瀬の目には「偉大な躯幹の所有者」で、「多少前額が高くなつてゐて、大きな幅広い額」を持つ人と映つた。成瀬はロランとの会話の印象を次のように記す。

氏は私の口から出る下手な仏蘭西語を丁寧に聴いて呉れた。外国語で話をする事の困難をよく知つてゐるのであらう。それでゐて、一部の仏蘭西人が然るやうに、まだ凡てを語終らない中に、早合点をするやうなことが決してない。軽率に物が云へないと云ふ点で、多少話が仕難いと云ふことも事実ではあるが、決してそれは、窮屈とか不愉快とかの感を起させるものではない。一語を云ふ毎に、氏の集中した注意が自分に向つてゐるのを感じると、満足のやうな恐しいやうな心地がして、考へながら会話を續けて行つた。度々自分でも文法上間違つたことを云つたと思ふことがある。けれども氏は私が云はうと思つたことをちやんと正確に了解して呉れる。

ロランは八十二歳になる父エミール・ロラン、母アントワネット・マリー、それに妹マデレン(マドレーヌ)の四人で、成瀬のとつたホテルの部屋の三階を飯の住まいとしていたのである。ロランは成瀬との初対面の様子を『戦時の日記』に記していた。引用しよう。

七月二十日土曜日 若い日本人の友、成瀬正一が着く。彼は私に会うために、数年前に出発した。非常に若く(二十二歳)<sup>(25)</sup>、小柄で、がっちりしていて、皮膚の色はあまり黄色ではなく、ほとんどヨーロッパ的だが、しかしタイプとしては非常に顕著である。彼はフランス語を話すのに骨が折れるので、辛抱よく言葉をさがす。彼の常用のヨーロッパ語は英語だ。彼は一年間合衆国で、ニューヨークやボストンに滞在して、私の友人、エルネスト・ブロッホ、ウォルドルフ・フランクたちと親しくした後、この春フランスに来て、四月から六月まで、砲撃中、パリにいた。それからリヨンに、そして先週の土曜日にスイス国境を越えた。彼はまったく人類的な精神の人であり、国境の区別を認めない(もつとも母国を離れてから、それに対する愛情が目覚めるのを覚えたことは認めている)。しかし彼は、開始されつつあるこの時代において、彼の同胞の中であって、彼の立場がいかに悲痛なものであるかを語る。(宮本正清訳)

第一次世界大戦中のヨーロッパでロマン・ロランは、祖国フランスの人々に誤解されることが多く、傷つき悩んでいた。成瀬はそうしたロランの悩みを、実に詳しく書き留めることとなる。ロランは極東の一青年に対して心を開き、語ったのである。成瀬はロマン・ロランの窮地に同情する。平和の時でも思想上の誤解は生じるが、「戦時に当って、書く人も読む人も、共にopenな心を持つてみるのであるから、猶一層のことである」とロランは言い、戦争に関してロランがなした言説に対する毀誉褒貶は、こうした誤解からくとロランは成瀬に語る。成瀬はロランが「無理解な人達に攻められて、弱りきつてあるやうに思はれる」との感想を洩らす。思想上の敵は当然ながら、味方に対しても用心しなくてはならないのが、ロランにとって大きな苦痛に違いないと成瀬は感じとっている。ロランはそうした中でも、個性の自由を重視する。この夜、成瀬正一はロランとの会話を通し、さまざまな思いにとらわれる。そして次のように書く<sup>(26)</sup>。

個性を失ふと云ふこと、即、思想家にとつては、自分の立脚点を失ふと云ふことは、自殺してしまふやうなものであるが、事実多くの思想家は、戦争が始まると同時にさうなつてしまつた。何故かと云ふと、戦争の時は、誤つた「協同一致」の精神が横行する。協同一致の名の下に、「あらゆる人はかく考ふべきものなり」とでも称すべき高圧的な氣風が、非常な力を以て思想界に蔓延するのであつて、真理とか人道とか正義とかの仮面を被つて、さう云ふ氣風が漲るのである。そして平生生半可に考へてゐる人達は、忽ちその氣風に压せられて足を攪はれてしまつのである。平和主義者が急に軍国主義者になり、社会主義者が国家主義者に豹変するやうなものである。

ロランとの会見第一日に、早くも成瀬正一はロランに触発されて、予言的洞察を行つてゐるのである。戦時下の誤つた「協同一致」は、まさに二十年後の第二次世界大戦における、日本の多くの作家や評論家・思想家のたどつた現象でもあつた。成瀬はそのことを

見抜いていたかのようだ。また、成瀬はロランの目下の關心が、純芸術よりも社会的方面にあることを強く感じる。戦争に際して、芸術の境に自分を閉じ込めて置くことの出来ない人をそこに見る。成瀬は言つ、「戦争は實際の前にあるのである。いくら顔を外向けてもそれは敵とした実在なのである。そしてそれから起る様々の残酷非道偽善罪悪は、皆、どのやうにしても、あらゆる人の眼に映り、従つて、あらゆる道德的に眞摯な人を泣せ憤せ極力反抗せしめるのである。ロラン氏はさう云ふ種類の最も偉大な一人であつたのである」と。

成瀬正一はヴェルヌーヴのホテル・ピロンに二週間と二日（十六日間）滞在し、毎日のようにロランと会話を交わす。「或夏の午後 ロオランとの一日」（『新潮』一九一九・五）は、ヴェルヌーヴ滞在中の一日、ロランと散歩した思い出を綴つたものである。成瀬正一の紀行文の恐らくは最高峰に位置するものである。ここに描かれたロマン・ロランは、ことばは少ないものの、偉大な姿をとどめてゐる。考えながら散策するロマン・ロラン、寡黙が彼をいつそう大きくする。

成瀬正一は帰国直後、『時事新報』に「ロオランとの三週間」<sup>(27)</sup>という文章を載せている。当時の「日記」からの抜粋と思われる。「一、二を引用しよう」。

「八月三日」 ローランは昨夜ゲーテに就いて語りぬ。大に興奮したる様子にてその偉大を説く。書架より、一独人の著せしゲーテのあらゆる肖像、マスク等を蒐めし書を示して語を次いで曰く「かくの如く偉大なる人は古今になし。あらゆる物に眼を通し、眼光紙背に徹する底の洞察もて凡てを知り、其神髄を掴み、更に自分のものとして自分の中に一つの世界を創造せり。」かく云ひつゝローランは自分の額を指して曰く「これが一つの世界なり」その世界の裡に彼は住み、悠悠自適オリムピアの高きに座し居たり」と。ローランはゲーテの面相が十八世紀の末になりて激変せるを指して「精神上的の痛苦がなくなせしむ」と。ロダンに就きて色々語りし末、一つの本を呉れたり。

「八月四日」 昨夜十一時迄ローランと語り。自

分の説の爲に入牢することあるべきを語り、彼は齒を噛み拳を握りて興奮せり。この湖上に雷鳴るを聴けり。

ロマン・ロランは成瀬正一の語る一言一句に耳を傾け、極東の青年の考えを知ろうとした。ロランは成瀬とはじめて会った日の二日後の一九一八年七月二十二日、『戦時の日記』に成瀬にふれた長文の文章を残している。以下のようなだ。

成瀬正一は東京の銀行家の息子で、非常な金持ちに違いない(彼の一門にも船の持ち主の叔父たちがいて、彼らは戦争で巨利を博した)。彼には四人の兄弟と二人の姉妹があるが、彼は長男である。そして日本では、長子相続権によって遺産の全部が長男に保証されている。彼は知的には父親と何の親しみももたない。もっとも彼は自分に対する父親の放任をほめてはいる。ただ家庭環境は彼に反対であることが感じられる。現代の日本では、それは例外的なことではない。私たちが経過しつ



つある時代における、彼の国の悲劇は、父と子と二つの世代を分離する溝である。多くの日本青年がその家庭から分離している。大多数がそこでは精神的反感のうちに暮らしている。奇妙なことには、そうした状態は、日露戦争以来とくに烈しくなった。敗れたロシアはその文学と思想によって日本を征服した。トルストイには日本人の信奉者グループがいくつもある。ツルゲーネフは芸術のための芸術派の保護者である。アルツイバーシエフ（サーニン）さえも、日本では、ヨーロッパにおける以上の影響を及ぼしている。しかし、ロシア思想を受け入れて日本に広めている人びとは誰も公けの地位にはいない。国民は相容れたい二つの部分に切り離されている。伝統に盲目的に縛りつけられた保守主義と、新しい思想である。ところが後者には団体が、組織が、指導が欠けている。ヨーロッパとの接触によって、将来、ヨーロッパ思想の孵化と同化の時期を経て、日本の精神の中に一つの爆発が起ることを成瀬は望んでいる。……

……  
すべての国民と同胞の親しみをもちつことを真に望みながら、成瀬は、アメリカ国民に対して強い反感を合衆国から抱いてきた。合衆国では、日本人の心の奥底まで傷つけるように一切ができていく。極端な騒音、雑踏、荒々しさ、高慢さ。思想的会話は一切不可能である。アメリカ人の対話者はおもむろに自分の考えに執着しているか、それとも自分の思想の欠乏から、こちらの言うことは聞きもしないで、肯定し、証拠もなしに肯定を繰り返し、そのあとで、相手を粉砕したと確信している。暴虐な階級的傲慢は黒人を人間社会から追い出し、彼ら不幸な人びとをたえず、虐待か私刑でなければ侮辱的待遇によって齎かしている。女も男に劣らずこの非人間的な傲慢が滲みこんでいる。成瀬はいう、「あの自称民主主義は、共和国と自由とをつねに口にしているが、わが日本よりもはるかに共和国でもなく、自由も実行していない。」それから、他の国民を理解することの根本的不可能性、他の人びとよりもはるかによく一切を知って

いるという平然たる自信、他の人びとに、それらの人びとの意思に反しても、富と幸福をあたえようという自信。……(宮本正清訳)

ロランは当時の成瀬の状況とその言説を、きわめて忠実に書き留めている。成瀬は不自由なフランス語でよくぞこれまで話せたものである。またロランはよく耳を傾けて成瀬のことばを拾ったものである。成瀬は自分の家族について語ったばかりか、父との精神的断絶をも語っている。ロランはそれに対して、「彼の国の悲劇は、父と子と二つの世代を分離する溝である」と的確な判断を下している。それは日本の近代文学のかかえる必然の命題 父と子 の問題でもあった。

成瀬正一がロマン・ロランに語った日本の状況、「伝統に盲目的に縛りつけられた保守主義と、新しい思想」の対立は、二十一世紀の日本をも覆っている。また、成瀬の言うアメリカに対する強い反感も今日的なもので、イラク戦争を経ていっそう強まった感がある。誠実なロマン・ロランは、不自由なフランス語で語る成瀬の考えを記録しながら、そこに真実があるのを見抜

く。極東の一青年のことばをロランは丹念に「日記」に記す。戦時下で、文章を発表することのできなかつた状況に追い込まれていた時だからこそ実現した行爲とはいえ、その誠実さ、勤勉さにも驚く。

ロランは成瀬のことをヘルマン・ヘッセや異性の友ソフィア・ベルトリーニや夭折した詩人ジャン・ド・サン・プリに書簡で誇らしげに紹介している。ヘッセには一九一八(大正七)年七月二十五日付の便りで、成瀬を「たいそう感じのいい、知的な人です」と言い、「あなたに感心しており、たいそうあなたに会いたがっています」(清水茂訳)と紹介している。ソフィア・ベルトリーニに一九一八年八月九日付で出した便りには、「一人の若い日本の友人が、いくぶんか私に会うために、二年まえに東京を出発した人が、ようやく、こちらで私と数週間をすごすことに成功しました。ひじょうに真摯で、ひじょうに自由な彼は、アジアにおける精神状態について多くのことを私に教えてくれました。それは、ヨーロッパにたいしてもアメリカにたいしてもけっして好意的ではありません」(宮本正清・山下千枝子訳)と書く。また、一九一八年八月二十五日付

でジャン・ド・サン＝プリに宛てたものには、「わたしのトルストイの生涯の訳者、知的で感じのいい、自由な、誠実な青年で、彼の同国人の現在の精神状態について大いに教えてくれました」（山口三夫訳）とある。

これらの書簡は、ロマン・ロランが成瀬正一をいかに買っていたかを語るものである。ロランは成瀬を八月四日に送り出した後、次のような感想を『戦時の日記』に書きつけている。成瀬の予言的言説をロランが認めながら、他方自身の考えを披露した感想だ。長くなるが、大事なものを含む記述なので、全文をあえて引用する。

私の若い友成瀬正一が、ヴィルヌーヴを、二週間滞在了のちに、八月四日に去る。その二週間の毎夜は私たちの間の長い会話に捧げられた。彼は、ヘルマン・ヘッセと知り合いになるために、一、二日の予定でベルンに行き、八月十五日までフランスに帰らなければならない。なぜなら日本への帰途につく前に、なお急いでイタリア旅

行をしたいからである。

私は自分が日本人とこれほど親しく話すことがまたとできるかどうかを疑う。彼は顕著な真摯さを持ち、私に対する彼の愛情のこもった信頼がいつそう自由に、しばしば素朴さにまで達せしめた。私は彼が心のいちばん深いところまで打ち明けたとは言いたくない。極東の人間は、自己を尊重する場合には、自分の感動を他に示さない。微笑は彼にとつては人種の一つの訓練である。決して彼は自分の涙を示さないであろう。枕を濡らすためにそれをためておく。しかし成瀬は自分の思想と彼の人種のそれとの秘密を私のために開くことを恐れなかった。（少なくとも、フランス語では少し骨の折れる彼の言葉が許すかぎりにおいて。）彼の話した秘密は一つならず、ヨーロッパ人にとつても、日本人にとつてさえも、なんら愉快ではないものである。彼の国においても、成瀬がそれらの秘密を洩らしたことを喜ばないだろうと私は確信する。一面には、アジアとアメリカ（その未来の衛星ヨーロッパに支持された）との大衝

突のほとんど避けがたい切迫、日本の政治思想は、ただ一つの自然の道として、この衝突の方向に向けられており、またその精神と物質力は、急ぐことなく、遲滞することなく、その準備をしている。他面には、将来猛威をふるうべき破壊の力の抑制力ともなるべき道徳的理想が、私たちの将来の敵の魂にまったく欠如しているという（いつそう驚愕すべき）告白がなされたのである。万人の心に、物質的現実主義、公的生活から排除された道徳觀念が逃避しうべき家庭の徳を私がせめて信じようとする、成瀬はたんに「家庭の義務はたしかに行われていきます。しかしそれは有益だと思つからず、それは道徳的理想ではありません」と言う。たしかに、神道は形而上学や道徳の問題をいまだかつて考慮したことはなかった。しかし私は、仏教とか、あるいは儒教のようなものが、ある程度まで、それに代わつたのだらうと思つていた。そうではないらしい。あるいは、日本の維新このかた、この民族の道徳生活はまったく後方に退いてしまつたらしい。成瀬はその弁解として次の理

由をあげ、それを自然だと思つている。ヨーロッパとアメリカから脅かされた日本は、それらの不安をあたる隣人たちの例にならつて、まず第一に物質化する必要があつた。そして一切の力が物質力の征服（騙取）に傾倒されている。そしてその力をやがて、彼の手本となつた国国に対して逆用するつもりである。しかし実はそれはかつて人類に起こつたもつとも悲劇的な運命というべきだろう。幾世紀をへた今日、アジアがヨーロッパに對抗して、世界の支配権を争わん（おそらく奪い取らん）とするときには、まさしくアジアはその偉大さと価値をなしていた一切のもの、すなわちその古来の魂、その賢者たちの崇高な伝統、もろもろの理想を放棄してしまつからである。私は成瀬に言つた、彼の第一の義務、彼の友たちのそれは、アジアのそれらの理想を救つことであると。少なくとも、もし黄色人種が白色人種を襲撃することを避けつるならば、それは破壊ではなくして、思想の更新となることが望ましい。しかし日本人の同化的傾向があまりに強いことを私は恐れる。

成瀬は、五十年後、日本がヨーロッパとアメリカを同化する時まで、生きていられないことは遺憾だ、なぜなら、そこからは非常に偉大なるものが生まれるだろうから、と彼は考えるのである。

おそらくローマと同じように。 Graecia capta……

「ギリシアはローマに征服されたが、ギリシアの文化と芸術は逆にローマを美化した」

アジアの精神の宝は何が残るだろうか？ われわれヨーロッパ人（たぶん敗北者）が、その宝を救わねばならないだろうか？ シナがもっとよくそれを保護することが望ましい、ヨーロッパ化、近代化の潮流はそこでもなかなか強いにしても。成瀬は断言して、もしいづれかの時代を選ばせられるなら、彼は日本では、現代以外を選ばずはなかつたろうという。現代は、数世紀このかた、日本史の中でもっとも興味のある、もっとも重要な時代だと彼には思われる。（宮本正清訳）

日本の無名の一青年成瀬正一と二十世紀の生んだ大作家であり、思想家でもあるロマン・ロランとの日々の対話は、本質的な課題を抱え、豊かで実り多いもの

があつた。アジアとヨーロッパの過去から未来への諸問題が二人の間で話し合われ、成瀬は維新以後の日本の精神的貧困、道徳的理想の欠如を告白し、未来の日本とアメリカとのかわりを予測している。ロランによれば「フランス語では少し骨の折れる彼の言葉が許すかぎりにおいて」成瀬は、その考えを伝えたのである。真摯で誠実な思考は未来を予言する。

先に大塚幸男の「ロマン・ロランと成瀬正一」<sup>28</sup>を紹介した。大塚はそこで右の部分のロランの文章を自ら翻訳し、その後「成瀬は、そしてロランは、第二次世界大戦を、とりわけ日本の対米宣戦を、予見していたといえるのではあるまいか」と記している。成瀬は先に引用したアメリカからロランに宛てた便り（一九一六・一〇・七付）で、「私は社会主義者」であると繰り返し述べていた。そして民族を越えた平和論をロランに語ったが、ここでは人種の問題にも言い及んでいる。

成瀬正一は平和問題をしきりに考えていた。それは戦乱のヨーロッパに身を置いたところから来る。帰途ジュネーヴで足止めを食い、パリに入ったところで、成瀬は休戦のニュースに接する。パリから一九一八

(大正七)年十一月九日付でロマン・ロラン宛てに出した便りには、「いまパリの人たちは、戦争が勝利に終わったため、すこぶる陽気です。外国人の私にもその人びとの当然の喜びが分かります。しかし同じくらい多くの民衆で泣いている人たちもいるのだと私は時おり考えます」とある。ヒューマニスト成瀬正一らしい文面だ。戦争が勝利で終わったパリの人々の喜びを伝える一方で、「多くの民衆で泣いている人たちもいる」とに考えを及ぼしているのである。

\*

成瀬正一は、第一次世界大戦下のヨーロッパを旅し、ロマン・ロランに会い、その信条を語った。それは金持ちのぼんぼんの放言と見なされるかもしれない。しかし、結果としては戦時下反戦論をとまえ、祖国フランスに戻る事ができないで孤立していたロマン・ロランを励ますこととなったのである。また、ロランとの会話には、彼が驚くべきほどの先見性の眼を以て、世界を見ていることを知るのである。

成瀬はロランと音楽とのかかわりも的確に把握して

いる。成瀬は「瑞西の旅」(『人間』大正九・二)で言う。「音楽を聴くと云ふことは氏にとつて、魂と魂の細密な接触なのである。渾然たる融合なのである。音楽によつてロオラン氏は、民族の相違の彼方に、言語風俗習慣の差異障壁を越えて、あらゆる国のあらゆる民衆の心と最も端的に融合ふことが出来るのである」と。ロランもまた、その優れた感受性や洞察力で、成瀬との会話からさまざまなものを得ている。特にアジアの人々の精神状態について学んだといい、日本とアメリカの危機的關係も、成瀬の便りや会話から察知していたのである。

成瀬正一とロマン・ロランの交流は、民族・人種・年齢を越えた精神の交流が、他者理解に基づく人と人との交流が、世界平和にとつていかに大切かを語る。絶えず高い理想を掲げて歩んだ若き成瀬正一の歩みをたどることは、世界の平和や人類の未来を考えることにもつながるのである。

注

(1) 成瀬正一(一八九二・四・二六)一九三六・四・二三)

- 三省堂の『コンサイス日本人名事典』をはじめ多くの人名事典は、「なるせしやういち」と誤記しているが、名は「せいいち」が正しい。
- (2) 第四次「新思潮」一九一六年二月一五日創刊
- (3) 小著「評伝成瀬正一」日本エディタースクール出版部、一九九四年八月一八日
- (4) 芥川龍之介「あの頃の自分の事」『中央公論』一九一九年一月一日
- (5) 芥川龍之介「ジャン・クリストフ」『新潮』一九一六年一〇月一日
- (6) 芥川龍之介「私の文壇に出るまで」『文章倶楽部』一九一七年八月一日
- (7) 芥川龍之介「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」『新潮』一九一九年一月一日
- (8) ロマン・ロラン「成瀬正一訳『トルストイ』」新潮社、一九一六年三月一八日
- (9) 「日記」井川恭の病氣療養中の日記、「井川日記」の中の一冊。現在大阪市立大学恒藤記念室蔵。
- (10) 「成瀬日記」成瀬正一が一高時代から東大を経て、アメリカ留学に至るまでの日記。高松市の菊池寛記念館蔵
- (11) 夏目漱石「野分」『ホトトギス』一九〇七年一月一日
- (12) 夏目漱石『虞美人草』春陽堂、一九〇八年一月一日
- (13) 夏目漱石『社会と自分』実業之日本社、一九一三年二月五日
- (14) 菊池寛「先生と我等」『新思潮』一九一七年三月一五日
- (15) 成瀬正一「航海」『新思潮』一九一六年一月一日
- (16) 注(3)に同じ
- (17) 『ロマン・ロラン全集』日本語訳にみず書房版がある。「戦時の日記」は、その第27巻、第30巻に相当する
- (18) 蛭原徳夫「日本人への手紙」『あとがき』『ロマン・ロラン全集36』みず書房、一九七九年二月一〇日
- (19) 注(8)に同じ
- (20) 注(3)に同じ
- (21) 芥川龍之介「出帆」『新思潮』一九一六年一〇月一日
- (22) 大塚幸男「ロマン・ロランと成瀬正一」『第一次世界大戦下、東西両洋の出会い』『福岡大学人文論叢』第一〇巻第四号、一九七九年三月
- (23) 小著「芥川龍之介の歴史認識」新日本出版社、二〇〇四一〇月二〇日
- (24) バイロンの歌ったシオン城 Байрон (George Gordon Byron) は、イギリスの詩人。ロマン派の代表者。この詩は「シオン城の囚人」をさす。

- (25) 非常に若く(二十二歳)ここはロランの間違いで、成瀬は当時二十六歳であった。
- (26) 成瀬正一「瑞西の旅」『人間』一九二〇年二月一日
- (27) 成瀬正一「ロオランとの三週間」『時事新報』一九一九年一月一日、一二日。成瀬はヴェルヌーヴ滞在を三週間と記すが、正確には二週間と二日である。
- (28) 注(22)に同じ